

2010年11月13日 講義1

講義タイトル：ナミビアの諸問題

講師：ABRAHAMS Otilie

キーワード：Namibia, poverty, education, AIDS, Jacob Marengo school

要約

11月13日の午前9時からカトゥトゥラ(Katutura)のジャコブ・マレンゴ学校 Jacob Marengo School)において校長先生のアブラハム・オティリエ(ABRAHAMS Otilie)先生からレクチャーをしていただくことになった。先生はナミビア、更にはアフリカ全体の諸問題についてレクチャーしてくださった。先生はナミビアを含めたアフリカの問題は”The Beautiful Ones are not yet born” (ガーナの Ayi Kwei Armah の小説) に書かれているように、貧困が独立後も改善せずむしろ悪化していくことなのだと語った。先生の問題意識は「アフリカはなぜ発展しないのか」という点であった。この疑問に対する先生の回答は、人々が政治に巻き込まれていないからだというものだった。普通自国の政治は国民全員が自分たち自身で行わなければならない。しかしアフリカ諸国の人々には自分たちで政治を行うという習慣が無い。これは植民地支配によって人々が自分たちで政治をすることを禁じられてきたためである。アフリカの人々に政治参加を普及させなければならない。アフリカ人は自分たちで自分たちのことを決めなければならないのだと言われた。次いで先生はバンツー教育(Bantu Education)の問題について語られた。ナミビアは南アフリカの占領統治下にあったためにアパルトヘイト政策がとられることとなった。その際、農作業などだけが教えられたのだという。ジャコブ・マレンゴ学校内で職業訓練などはしないのかというこちら側の質問に対し、先生はそれはバンツー教育と同じだからやってはいけないと言われた。先生はナミビアではエイズの感染率が非常に高いことについてもレクチャーされた。そしてナミビアでは貧富の格差が非常に激しいこと、この国が現政権の腐敗によって発展を阻害されており、いまだに「独立していない」ということなどを説明された。確かに貧富の格差と腐敗はこの国にとって深刻な問題であるようである。あるナミビア人の男性も、政府は北部にばかり診療所、水道などのインフラ設備を作って南を放置するか、それとも援助資金をポケットの中に納めてしまうかだと言っていた。ただこの国の貧困がアフリカの平均的水準から見て深刻なのは疑問が残った。カトゥトゥラのスラムの子供たちはビデオゲームをして遊んでいた。この国の貧困層の生活水準と、例えばウガンダの貧困層の生活水準を比較する必要があるだろう。また職業訓練がアパルトヘイト的だという考えが印象に残った。ケニアの人々も職業訓練を植民地支配的だと考えているという(吉田 1986)。しかし工業は人々を貧困から救う有力な手立てではないのだろうか。エリート教

育だけに教育を限定することは結局白人への追従を強化してしまうことにも繋がりがねないように思われるのである。

【参考文献】

吉田昌夫(編)(1986)『適正技術と経済開発—現代アフリカにおける課題』

(報告者：丹羽爾朗)